



あなたは奇跡を信じますか

後編 幻の記録

ノンフィクション書籍

E G W エクレシア一粒の麦

奥山 欣也

青山ライフ出版

幻の記録 ◆ 目次

前説	5
貧乏(びんぼう)の霊	7
天国の式典	29
ひとりでは逝(い)かせない	33
祈りの霊	46
悪霊の挑戦	55
阿弥陀如来像の化身(けしん)	76
黒いドレスの女(おんな)	84
天国行きの乗車券	88

神よりのメッセージ	101
二匹の蛇	107
祈りの空間	122
キリストの御名(みな)	134
癒しの信仰	149
神への賛歌	156
終章	160
追記	178

前 説

私が、キリストの十字架の贖あがないに浴よぐし、その靈たましいに幸いを得て、生きる希望を聖書に学び、キリストが語るその福音に信仰をおいた時に、目には定かではないが、私の人格が、日々新しく変えられて行くのを覚えた。

この世のことわざにも「**朱しゆに交まじわれば赤あかくなる**」の例えで、劇的に変えられな
いまでも、その人の人格は止とどまる事無く刷新さっしんされ、何時の日か、自分自身でも納
得とどが行くほど豊かに変えられる時が来る、それがキリスト信仰の本質でもあると
思う。

私は、この幻と云う神の御業を通して、否定する事が出来ない所まで持ち運ば
れて、まるで階段を登るかのようになり、私の信仰は、幻と出会う度毎に、その靈性
は高められ、今では絶対に揺らぐ事のない確信となり、その心にも信仰の花が咲
きつつある。

前 説
これから紹介する幻の記録は、自分が思い描いたビジョンではなく、ある時突
然、一方的に神に依って与えられたものであり、教養とか知性では絶対に説明す

前 説

る事の出来ない、不思議なる出来事の中に、霊的な世界を垣間見て来た。

理屈抜きの世界、不思議なる神の世界に、是非、皆様を招待をしたいと思う。

この神に依る奇しい御業を通して、あなたの人生に新しい一頁が開かれ、霊であられる御神のなせる御業を、是非、あなたのものとして戴きたく、ここに大能なる神の御業を紹介する。

アーメン。

貧乏の靈

私は北海道の産で、札幌生まれの札幌育ち、生粋の道産子である。

札幌の街を南北に貫いて流れる豊平川と、西にそびえる藻岩山を見て育った。愛の掟でも書いたように、私は養父の仕事の関係で、札幌の街を転々として渡り歩いて来たので、幼友達もいなければ、定まった故郷といえる場所も無い。

若い時は、真駒内と千歳にある米軍基地で働いていた。

仕事も両手である程、様々な仕事をして来たが、米軍の基地である真駒内では、メッサホールでK Pをしたり、ハウスボーイをしたり、冬は小中学校の生徒と、米軍の将校の奥さん達を集めて、スキーインストラクターをしたりもしていた。

また、千歳では下士官クラブでコックをしたりしていたが、米軍が引き上げてからは、観賞石の販売や、洋服の直し業を営んだりしていたが、車の運転が好きなので、最後には、運送業務を主とする有限会社奥山産業を設立した。

それ以外にも、まだまだ色んな事をして来たが、それらは割愛する。

洋服の直し業は、薄野すすきのの近くの裏小路で開業をしていたが、運送業は東苗穂ひがしなえぼという閑静な所に、形ばかりの事務所を構えて営業をしていた。

有限会社なので役員をおいてはいたが、私自身、車の運転が好きなのと、おまけに旅が好きと来ているから、つつい若い者を事務所において、自分自身が車を運転し、札幌く東京間の定期便に乗って走ったりもしていた。

集荷は、時として岩見沢いわみざわとか帯広おびひろ、まれには稚内わっかないなどもありましたが、東京向けの出發は、時として夕方になる事もままあった。

暗いうちに集荷に向かい、一旦家に帰って来て風呂で汗を流し、食事をしてから出發するのである。

札幌の北の外れから、街の中心街を通り抜けて、定山溪温泉じょうざんげいの湯煙りを眺めながら、旅立ちの心を新たにし、全長四十キロ以上もある中山峠なやまとうげを登る。

頂上に近付くと、熊笹に覆われた山あいを白樺林が覆い、緑の熊笹を貫くように立ち並ぶ白樺の幹が、目に染み入るように映はえて美しく、一服の絵のような風景を眺めながら、峠の山頂へとひた走る。

この中山峠の景色は、春夏秋冬本当に美しく、この峠を行き交う旅人の心を慰

めてくれる。

特に、秋から初冬にかけての紅葉は一見に値し、全山を白雪が覆い、淡い黄緑の木々や松の青が点在する中に、真つ赤に燃え立つようなもみじ葉が、絵の具を塗ったかのように散りばめられて、白銀輝く純白の世界に、赤、青、黄緑の原色の木々の葉が、まさに美の極致を演出し、一瞬の秋の終わりを余す事無く見せてくれる。

白雪を、紅くれないに染める秋の終わりの日々は、まさに絶品としか云いようが無い。そして、中山峠の山頂にある展望台から見る羊蹄山ようていざんは、蝦夷富士えせふじとも呼ばれ、そのたたずまいは荒削りながらも美しく、優雅な駿河富士に比べて、原生林に座してそびゆるその姿は、威風堂々尊厳いふうどうどうそんげんに満ちて美しい。

その羊蹄山の裾野を回り幾ばくか走れば、眼下に洞爺湖とうやこが見えて来るが、その水みなも面に中島の山がそびえる風景は、水に漂う浮き島が、波に揺らぐが如くに見える。

更に進むと静狩峠しずかりとうげに差し掛かるが、幾つかのトンネルを通り抜けながら、眼下に広がる海原を見る時、北国の海の色がそこにあり、濃紺の波間に磯舟が浮かび、

定置網の浮き球が並び見え、まさにポエムである。

峠を降りたら、道は海岸沿いになるが、幾らも走らないうちに山崎という所に着く。

全く家の無い海岸線に、ぽつんと一軒の平屋の家が建っているが、その野中の一軒家が曲者で、そこが交番だとは誰も思わないだろうし、こんな田舎の一本道で、測定なんかしているとは思えない。

内地から来た旅行者達は、何十キロも続く直線の平坦地を走り、ついスピードの出し過ぎで、よくこの山崎で測定に引っかけり、赤切符を切られていた。

北海道には直線道路が多く、気がついたら何十キロもオーバーをして捕まったなんて事が珍しくなく、下手に逆進なんかして駐車をしていたら、すぐに発見され切符を切られる。

さて、話は再び元に戻るが、山崎を過ぎたら長万部おしやまんべに着く。

この長万部の駅前で店を出している蕎麦屋のかけそばは、また格別に美味しいが、そこからすぐ近くに蟹を売っている店がある。

活きの良いここの毛蟹の味は、ただ絶品としか表現のしようが無いが、価格も